金融の学びで、明るい未来を

和洋国府台女子中学校　二年　小坂　莉子

「えっ、大好きなバナナが気楽に食べられなくなるの！？」
私は、フィリピンの駐日大使がバナナの値上げ要請をするニュースを見て沈んだ。数カ月前の授業で、戦争の長期化により円安になると習った。資源国ではない日本は、食料やエネルギーの自給率が低く、輸入に頼らざるを得ない。そのため、物価上昇が止まらず、安くて美味しい果物の代表格のバナナにも影響が出たのだ。私は落胆した。

一方で、円安のニュースに喜ぶ母がいた。十二年前、一ドル七十七円で預けた米ドル預金が百三十五円になり、増えているという。
円安は悪いことだと思っていたのに資産を増やせるなんて凄いとびっくりしていると、「莉子のお年玉も二十五%増えているよ。」と母が言った。六年前に祖父母から貰ったお年玉をジュニアNISA（ニーサ）で投資してくれていたのだ。現在、貯金をしても利子がつかない中、利益を生み出せる方法があると知り興味が湧いた。そして、家計負担の減少の一助になるのではないかと考えた私は、投資について調べてみることにした。

投資は預金と違い、お金を増やすことが可能だが、リスクもあるため、金融知識も必要だ。損失を恐れ、安定や確実性を求める日本人は、投資に消極的と言われていた。そんな中、今年度から高校の家庭科で資産形成の授業が盛り込まれ本格的な金融教育が始まった。私はこの方針に大賛成だ。他国と比較して金融教育については後進国と言える日本。なぜなら、「お金＝不浄なもの」「子どもがお金の話をするなんてはしたない」といった道徳心が一般的だった時代が長く続いてきたからだ。しかし、国の人口の半数以上が投資を行っているアメリカでは、子どもに金融教育を学ばせるのは当然との理解があり、幼少期からのお金の管理や計画を個人に任せている。

一方で、日本の高齢者は、投資教育はゼロで知識を持たずに投資をするため、損をしている人も多いそうだ。もっと早くから学校でお金について学べていたら、結果は違ったかもしれない。

先日テレビで幼稚園児が、株取引の疑似体験をしている特集を見た。「私の買った株が上がったよ」とすらすら口に出す園児の姿に、衝撃を受けると同時に中学生の私は

焦りを覚えた。

最近、銀行では、小学生以上に対し、金融知識をクイズ形式で手軽に学べるサイトを作っている。また、支店に招き、銀行業務などを体験し楽しみながら学べるという記事を新聞で読んだ。私のお年玉が投資で増えた経験や園児の擬似株取引など、幼い頃から実際に投資を体験することで、より多くの経験と知識を持つことができ、将来の生活設計にも役立てることができると感じた。古くからあるお金に対する日本独特の意識も変わる時機が来たのだ。

今年から成人年齢が十八歳に引き下げられた。トラブルに巻き込まれないためにより早い段階からの金融教育が必要になる。難しい経済用語を学ぶのではなく、社会に出て必要な知識を正しく理解し、主体的に判断する能力は、社会人になる前に体験型の学習を通して身につけるべきだ。

また、子どもだけではなく、金融教育を受けてこなかった大人も一緒に学び、金融知識を皆が身につけられれば、国全体の経済が活性化し、日本の豊かさに繋げられる可能性もある。

バナナの値上げにショックを受けた私だったが、ジュニア NISA でお年玉が増えた事で安心した。この先、増えたお金で、値上がりしたバナナも迷わず食べることができそうだ。

投資は、家計を助けることもできる。つまり、金融を一人ひとりの生活と結びつけて考えていく時代なのだ。それにはまず、社会や経済に関心を持つことが大切だと思う。金融に関する学びが私たちの明るい未来に繋がっていくことを願っている。

（参考文献）日本経済新聞　二〇二二年六月一一日